

日本帝国召唤

珪素生命体

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

12・5事件の傷が未だに収まっていない日本帝国は12月9日未明、突如として異世界に召喚されてしまう。

異世界国家とBETAが日本帝国に襲いかかる!!

# 目次

## 序章

第一話：遭遇

1

第二話：遭遇 (2)

6

## 序章

### 第一話：遭遇

西暦2001年12月09日。この日、日本帝国は異世界へと転移した。

未曾有の事象に見舞われた帝国は混乱したが、被害は最小限に抑えられていた。日本帝国その物が国家存亡を賭けた戦時下に置かれている事と、数日前に起きた軍事クーデターに対する非常事態宣言下に置かれている事が功を奏した。

皮肉な事である。12・5事件により無視できない軍事的、政治的空白を生むことになった帝国が、結果的に混乱を最小限に抑える事に成功したのだ。

しかし、帝国軍と国連軍は違った。

外国との通信が途絶した瞬間全ての部隊に防衛基準体制1が発令され、数時以内に戦闘体制へ移った。特に佐渡島方面は日本海に展開中であつた帝国連合艦隊第一、第二戦隊が急行し第二防衛線に展開する部隊と共に甲21号目標に対する想定外の漸減作戦に参加した。

この一連の漸減作戦により、佐渡島地表のBETA群は深刻な打撃を負つたと判断され二日後の12月11日に戦闘終了が宣言されることになる。

無論、事態は変わらず帝国が置かれた状況は深刻なものであつた。外国との連絡が途絶えたことにより、食料を始めとした外国からの輸入に頼っていた物資は備蓄分だけで補う他なく、全ての備蓄が底を尽きるまで一年の猶予という短い時間が帝国に与えられる事となる。

甲21号目標に対する突発的な漸減作戦の最中、帝国政府は自国に置かれた状況の把握に全力を注いだ。

これにより判明したのは現在帝国が把握していた全ての恒星と惑星の存在が消滅し、代わりに未知の星が出現した事と水平線が大きく延長されたという情報であつた。帝国はこれらの情報と自国に置か

れた状況を合わせ日本帝国が地球とは異なる惑星に転移したという結論に至った。

事実として日本本土を脅かしていた鉄原ハイヴが存在する朝鮮半島の消滅に伴うユーラシア大陸の消失は帝国が地球とは異なる惑星、即ち異世界へ転移したという国家異世界転移説の信憑性を裏付ける根拠となる。

今回の事件の原因が判明したと同時に帝国海軍は新天地搜索のため『ニューコロニー作戦』を発動させ、周辺海域の搜索を行った。レーザー級の存在を警戒して旧日本海側、旧オホーツク海側の搜索は最低限に留まるものの、台湾方面と旧太平洋方面の搜索は積極的に行われ、最終的に沖縄県普天間基地所属のP-3C対潜哨戒機が未知の文明と接触を果たした。

しかし、その数時間後P-3Cと同じ方面の搜索を行っていた帝国海軍所属大型巡洋艦足柄は未確認勢力所属と思わしき木造船と接触、一触即発という事態まで発展してしまった。

このような事態になった原因は、足柄が未確認勢力圏内に侵入したことと先のP-3Cが未確認勢力の都市上空を飛行したことであった。

未確認勢力はクワ・トイネ公国と名乗り、領海に侵入した足柄に対する臨検を要求と状況の説明を足柄に求めた。

これに対し帝国政府は頭を抱える事になる。なんせ意図していないとはいえ、他国に対する領空侵犯と領海侵犯を二度も連続でやってしまったのだ。公国の日本帝国に対する印象は最悪の物であるという事は想像に容易い。

佐渡島ハイヴがまだ健在の今、日本帝国には敵を作る余裕は存在しないのだ。その上、物資不足という問題も相まって帝国政府の対応は極めて速かった。

帝国政府はクワ・トイネ公国所属の軍船ピーマの臨検を承諾するよう足柄に指示し、艦長を通じて謝罪と賠償の用意があると伝えた。その上で国交の開設を前提とした交渉を要求し、その要求はクワ・トイネ公国の首相「カナタ」へと伝えられた。

クワ・トイネ公国は日本帝国の出現に困惑するはかなかった。彼らからしてみればいきなり鉄でできた未確認騎が領内に侵入し、迎撃に上がったワイバーンの追跡を圧倒的な性能差で振り切った上に小島のような軍船が領海に侵入してきたのだ。その上、技術では明らかに帝国が上であるのにも関わらず公国側の臨検の要求に素直に応じた上に国交の開設を前提とした交渉を要求してきたのだから当然の事と言えよう。

ロウリア王国の脅威が迫る中、新たな脅威の出現はクワ・トイネ公国にとって何としてでも避けたい事であった。

それらの理由もあって公国は帝国の謝罪と交渉の要求を受け入れた。

交渉の際、帝国の技術力の高さに衝撃を受けつつもそれ以上に帝国の外交団の態度に公国側は驚愕したのであった。

大使の態度があまりにも友好的だったのだ。この世界は弱肉強食が常であり、技術力が低い国家は強国にとって絶好のカモだ。それ故に交渉の場においても強国の大使は小国を下に見る傾向があり態度として現れるのだ。

対する帝国の大使は全くの真逆であり、好感が持てるものであった。

更に交渉の場において先の事件の謝罪を改めて伝えられた事もあり、公国の日本帝国に対する悪感情は完全に払拭された。

これにより両国間の交渉は双方が想定していた以上にスムーズに進むことになり半月以内に国交が樹立されるに至った。

帝国にとっても公国にとっても、今回の交渉は実に実りのあるものであった。

国交の樹立の他に交易に関する交渉も行われ帝国はインフラを輸出し、逆に公国は莫大な生産量を誇る食料の輸出を約束したのだ。

一刻も早く食料を確保したい帝国と、ロウリア王国の侵攻に備えたという両国の思惑が一致した結果でもあった。

更にクワ・トイネ公国は日本帝国の支援を得る為に一か八かの賭け

に出た。

それは軍事同盟の提案と代替案である軍事支援である。現在クワ・トイネ公国が置かれている状況は極めて深刻なものであった。亜人殲滅を掲げている隣国のロウリア王国は破竹の勢いでロデニウス大陸西部を制圧し、その強大な武力を公国と同盟国であるクイラ王国へ向けようとしていた。

公国は世界でも有数の食料生産国であるが、人口がロウリア王国と比べて圧倒的に少ない故に相対的に軍事力が低い有様であった。

周辺国に援助を求めても大国であるロウリア王国と敵対したくない国が圧倒的に多く、満足な支援を受けられない状況なのだ。そんな中現れたのが日本帝国である。

彼らにとつて、帝国は正に福音だ。極めて高い技術を有し、軍事力も高いと思われる国家からの支援を受ければロウリア王国と対等に渡り合える可能性があるのだ。

だからこそ躊躇はしなかった。公国は帝国に対し、軍事同盟の対価としてあるカードをだした。

「食糧輸出の半年間無償」

彼らの食料自給率の低さを餌に、クワ・トイネ公国は日本帝国との同盟を画策した。

そしてロウリア王国の脅威を伝え、放っておけば公国と帝国も共倒れすると半ば脅しながら同盟を迫った。

日本帝国はあまり乗り気では無かったものの、公国の脅し文句に屈する形で了承した。食料の輸入が出来なくなるという面もあるが、ロウリア王国の政策に嫌悪感を抱いていたことも同盟の提案を飲んだ理由であった。

先も述べた通り、ロウリア王国は亜人殲滅を掲げた政策を取っており亜人に対する扱いは極めて過激だ。占領した土地に住む亜人は全て殺し、その土地の文化も歴史も根こそぎ破壊し尽くす事を躊躇わない。

人の形をしたBETAと言ってもいいだろう。日本帝国のロウリア王国に対する印象は最悪なものとなっていた。

そんな理由もあつて西暦<sup>中央暦</sup>2002年<sup>1639年</sup>1月下旬に日本帝国はクワ・ト  
イネ公国との軍事同盟を結ぶことになった。



## 第二話：遭遇（2）

中央暦 1638 年  
西暦 2001 年 12 月下旬

クワ・トイネ公国との交渉が成功したことにより、新世界に対する橋頭保の確保に成功した日本帝国はロデニウス大陸南東部に位置する国家「クイラ王国」に対し、使節団の派遣を決定した。

事前の情報の結果、クイラ王国国内には石油らしき資源が噴出するという事もあり、日本帝国にとって王国との国交開設は最優先課題となる。

一方のクイラ王国は日本帝国に対し、懐疑的な視線を向けており、この世界における最大の仮想敵国であるロウリア王国との戦争が近づいている状況から、日本帝国の使節を受け入れるかどうかの判断に窮していた。

クイラ王国の国土そのものはクワ・トイネ公国と同規模であるが、作物が育たない不毛の地が国土の大半を占めており国家の規模はロウリア王国は勿論のこと、クワ・トイネ公国より遥かに劣るものであった。それ故に王国は国外からの介入に敏感であり、突如として出現した日本帝国に対し警戒突如として出現した日本帝国に対し警戒感を露わにしていた。

そのような理由もあり帝国と王国間との交渉は難航していたが、クワ・トイネ公国の仲介もあつて両国間は交渉のテーブルに着くことになる。

石油資源の調査とそれに伴う採掘権を求めた日本帝国の提案に、クイラ王国側は首を傾げた。

石油の特徴を聞く限りだと、確かにそれに該当するものが国内の至る所から湧き出しているが、クイラ王国にとってそれが何の役に立つか理解できなかつた。

彼らからしてみれば石油という物は保管が難しい上に、匂いが酷く使い勝手の悪い資源にはなり得ない言わば欠陥品と言えるものであつた。貧困国である王国にとってそれらが金になるのなら喜んで輸出するものであるが、利用価値があるとは到底思えない。しかしク

イラ王国にとって自国の利益に？がるのなら、燃える水でも燃える石でも輸出するのに躊躇する理由は無かった。

国土の性質上どうしても貧困国からの脱却は不可能に等しく、国民は今日を生き残るだけ精一杯なのが現状であった。国を挙げての人材派遣による収益だけが頼みの綱である上に、ロウリア王国の存在も相まって国家の寿命は残り僅かと言っても過言ではない。

そんな中、日本帝国の出現は正に天の恵みと言っても差し支えないものであった。石油輸出の対価として出したインフラ整備の内容はどれもクイラ王国側に多大な利益を与えるものばかりであり、帝国の申し出を断る理由は無かった。

■ クワ・トイネ公国、クイラ王国との国交を開いた日本帝国の出だしは順調そのものであった。

一時は国家存亡の危機と危惧された帝国であったが、この二か国と国交を結んだことにより状況は一変する。食料問題と燃料問題の解決によりなんとか一命を取り留める事に成功した日本帝国は急ピッチでインフラ整備を推し進め、鉄道輸送網の構築と湾港の整備を短期間で成し遂げさせた。

帝国軍を総動員して構築された鉄道網によって食料が湾港に集められ、海路にて日本本土へと運ばれる予定だ。輸送船団の規模は凄まじく、莫大な輸送量を補うために戦術機母艦や軍用艦艇をも動員され、昼夜問わず港は船で埋め尽くされるほどであった。

それと並行して日本帝国は新世界における確かな地位を築くべく、ロデニウス大陸西部を支配するロウリア王国に対し使節団の派遣を行った。

結果は凄惨なものであった。

クワ・トイネ公国とクイラ王国との国交を結んでいる事から潜在的な敵国と断定され、門前払いされる。それどころか初めてワイバーンを見た外交団の面々を見たロウリア側は「ワイバーンを知らぬ未開の蛮族」と嘲笑し、帝国に服従を迫った。

無論、帝国はロウリア側の要求に反発するも当のロウリア王国は

「服従が出来ぬのなら即刻亜人共と縁を切れ、そうしたら交渉の席に着くこともやぶさかではない」と、明らかに日本帝国側の尊重を考えない無茶苦茶な要求を外交団へ突き付けたのであった。

このことを切っ掛けに、日本帝国はロウリア王国を覇権主義を提唱する国家として警戒を強める要因となる。

更に情報収集の結果、ロウリア王国が持つ人類主義思想と度重なる軍拡によって近い未来、ロウリア王国がクワ・トイネ公国、クイラ王国に対し軍事侵攻する懸念があると判断した帝国は、クワ・トイネ公国が提案した軍事同盟案の検討を始めることになる。

クワ・トイネ公国とクイラ王国が滅ぶ事態にもなれば日本帝国は再び食料問題と燃料問題が噴出する事になり、振り出しに戻る事から帝国は最悪な事態を避けるため再度外交団の派遣を決定した。